論　文

ヴィクトリア朝文化におけるウォーキングの諸相

中島　俊郎

はじめに

ヴィクトリア朝文化におけるウォーキングの在り方を概観するならば、明らかに対立する二方向が見てとれる。それは求道的ともいえる精神性を求める歩行形態と、自己顕示を前面に押し出し経済活動に直結しようとする歩行形態とに大別できよう。後者については、ジョージ朝において隆盛をきわめた「ペデストリアニズム」という、いわば賭けを対象にした一種の競技がヴィクトリア朝前期にさらなる展開をみせ、キャプテン・バークリー（Captain Barclay, 1779–1854）による身体性の誇示により頂点に達した。バークリーは1,000時間で1,000マイルの歩行を競い、1,000ギニーの賞金を獲得するというバークリー・マッチ（1809）を企画し、勝利をおさめたのであった。[1] 思想家レズリー・スティーヴン（Leslie Stephen, 1832–1904）はバークリーの卓越した脚力に対して賞賛の念を惜しまなかったが、歩行の精神性を無視して誇示に傾くのは、ウォーキングのあるべき精神に背馳すると糾弾したのであった。[2] こうしたペデストリアニズムはパノラマという視覚媒体と結びつき登山という歩行のかたちでもって活性化していくことになる。スティーヴンと同じアルパイン・クラブに属していたアルバート・スミス（Albert Smith, 1816–60）は、スティーヴンが唱えるウォーキングの精神性と対極に立っていたのである。スミスのパノラマ公演『モンブラン・ショー』はヴィクトリア朝最大の見世物となり、イギリス国民の足をアルプスへ向けさせた功績は大きい。そして同時に、ジョン・ラスキンの非難にあるように、[3] 登山、歩行の卑俗性を拡大させたのも否めまい。

歩行の精神性を看過し、身体性に傾注したバークリーに代表される「ペデストリアニズム」を批判したスティーヴンは、歩行と自己との対話において、黙想を通じて自らを律し、思索を深めた人であった。こうしたスティーヴン自身のなかに包摂されている歩行を通じた思索こそ、「サンデー・トランプス」(Sunday Tramps) という散策会にヴィクトリア朝後期の知識人を集結させ、数々の知の胎動をうながす原動力となっていたのである。こうしたウォーキングの精神性は、たとえばロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850–94) などへ受け継がれていき、月刊誌『コーンヒル・マガジン』(*Cornhill Magazine*, 1860) の編集長としてスティーヴンは「発見した」スティーヴンソンに「ウォーキング・ツアー」('Walking Tours,' 1876) を書かせ、やがて『旅は驢馬をつれて』(*Travels with a Donkey in the Cévennes*, 1879) というウォーキング文学の傑作を生み出すところとなり、さらにヒレア・ベロック (Hilaire Belloc, 1870–1953) の歩行により信仰を問い直す『ローマへの道』(*Road to Rome*, 1905) へと継承されていく。

ここでヴィクトリア朝文化史のなかで歩行を考えるとき、注意しておかなくてはならない点は都市空間におけるウォーキングである。ロンドンの街路を避けて、郊外、とりわけ近隣のカントリーサイドのみを研究対象にしがちであるが、都市における歩行についても再考しておかねばなるまい。ロンドンがアムステルダムに代り世界都市へと変貌していった時期に、詩人ジョン・ゲイ (John Gay, 1685–1732) の『トリヴィア――ロンドン散策術』(*Trivia, or the Art of Walking in the Streets of London*, 1716) が書かれたのは、きわめて注目に値する。その系譜としてトマス・ド・クィンシー (Thomas De Quincy, 1785–1857) の『阿片常用者の告白』(*Confessions of an English Opium Eater*, 1822) が認められる。また同じくロンドンの闇を徘徊する『オリヴァ・ツィスト』(*Oliver Twist*, 1838) や「夜の散策」('The Night Walks,' 1861) を書いたチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812–70) をヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892–1940) はロンドンにおける「フラヌール」の実例として認めているのである。フランス革命の時期、歩行を政治、社会改革と関連づけたジョン・セルウォール (John Thelwall, 1764–1834) の『逍遥』(*The Peripatetic*, 1793) のように、自らの政治的主張を

歩きながら訴えるロマン派論客とつながるのは、「歩く牧師」ことA. N. クーパー（A. N. Cooper）である。ヨークシャーからローマまで歩いた記録（*A Walk to Rome: A Journey on Foot of 741 Miles from Yorkshire to Rome*, 1887）は、歩行が信仰、健康につながる手段として賞揚し、同類の書籍を数多く出版し、[4] 啓蒙活動を展開した。こうした概観だけでもウォーキングの多様な諸相をうかがえよう。

本稿はヴィクトリア朝における歩行の文化史を検討するわけだが、[5] まずアルバート・スミスによる『モンブラン・ショー』をとりあげ、登山活動が生まれる契機となったパノラマ公演という視覚媒体が文化変容を促した実例をとりあげたい。次にアルプスの高峰を「聖堂」とみなしたレズリー・スティーヴンが晩年に組織した散策会「サンデー・トランプス」による知のネットワークを追究し、さらにスティーヴンも含めその散策会から何人かの会員が参加した、「歩く権利」（right of way）を擁護した「コモンズ保存協会」の活動を検討して、ヴィクトリア朝における「歩行」の諸相と意義を問い直してみたい。

I　アルバート・スミスの『モンブラン・ショー』

登山はヴィクトリア朝文化のなかで突如として出現したかのような感を覚える。登山という文化変容の一因は、視覚的な媒体から育まれていった。スミスの『モンブラン・ショー』が公演される以前、多くの観客を集めたパノラマ・ショーがロンドンにおいてすでに公開されていたのである。その先行をなしたのは、自称、「無学で貧乏な」画家ジョン・バンヴァード（John Banvard, 1815–91）であった。1848年秋に渡英してきて、12月にはアメリカで大好評であった『ミシシッピ・ショー』（*John Banvard's Mississippi Panorama*, 1849）をもってピカデリーにあるエジプシャン・ホールで公演の幕を切って落としたのである。このアメリカ人パノラマ師は、まずミズーリ河、ニューオーリンズまでの1,200マイルに及ぶミシシッピ河を描きパノラマ化して見せた。39景から成り立っていたが、あと23景（オハイオ河）、15景（ミズーリ河）が追加された。ロンドンへ来るまえにアメリカ国内を巡行したのだが、9ヶ月に及ぶボストン公演では25万人もの来場者があり、またニュー

ヨークでは7ヶ月にわたり公演がなされたが18万人近くの観客を集めた。[6]

バンヴァードが公演したパノラマの新機軸は遠大な情景をただ見せるだけではなく、移動していく情景ごとに詩歌を引用し、また冗談を飛ばし、ときには時事的な話題を織り交ぜ、観客を退屈させない巧みな話術で展開した。バンヴァードの公演が成功した後、パノラマ・ショーは弁士の存在なくして成立しなくなった。描かれたパノラマの画質と同様、弁士には機知あふれる話術とともに、情景を喚起させる豊かな語彙力もまた不可欠とされた。スミスの原型はここにあったのである。1850年から1852年の間、つまりスミスの『モンブラン・ショー』が公演されている期間と重なる時期もあるのだが、バンヴァードはスコットランド、ウェールズ、アイルランドにも巡回し、40ヶ所以上の地方都市で公演を行い、たとえばエジンバラでは9週間で5万人近く集客し、そしてロンドンでは24ヶ月間、60万人もの観客を集めていたのである。バンヴァードの計算によれば、1,000日のパノラマ公演で100万人の集客があったという。[7]

そもそもパノラマという語は「すべてを見渡す」という原義であり、一望のもとに全体を俯瞰する意味を担っていた。人間の視線が届かない都市空間を鳥瞰図のように描くパノラマが続出したのも当然のなりゆきであった。やがてパノラマは地平線を拡張し二次元的な視覚を広げてみせたのである。こうしたパノラマ的視覚は、同時に発達してきた鉄道の車窓から見る光景ときわめて似ていた。眼前を通過していくパノラマは平面の連続にすぎず、事物の奥行きは皆無であり、それは閉じられた空間であった。だがここにスミスは新機軸を持ち込んだ。『モンブラン・ショー』の第二幕において、水平的視覚から垂直的視覚へと視覚の転換をもたらしたのである。[8]

『モンブラン・ショー』を公演する前、アルバート・スミスは同様なパノラマ公演を催していた。1850年5月28日、ロンドンのウィリス・ルームズで公演された『アルバート・スミスの大陸横断』(*Route of the Overland Mail to India*, 1850)は、陸路でインドに到る大陸横断を描いたパノラマであった。この興業はロンドンにおいて少なからぬ成功を収めたため、1851年9月1日から11月28日までの短期間にもかかわらず42ヶ所もの地方都市を巡回したのであった。[9]

スミスは実際にモンブランを登攀することから始めた。1851年8月12日、

スミスはパノラマ画家ウィリアム・ベヴァリー（William Beverley, 1810–89）と3人のオックスフォード大学生、16人の案内人を引き連れて、モンブラン山頂を目指した。仔羊の脚肉4、羊の肩肉4、仔牛肉6片、牛肉半頭分、鳥肉11、鶏肉35そしてパン20塊、棒状チョコレート6ポンド、チーズ10塊、さらに干しスモモ6箱を、そして60本ものワインの他にシャンパン、コニャック、ビールなどの酒類と何十本もの飲料水を案内人の背中に背負わせて一行はモンブランの斜面を登っていった。晴れ間の間隙を突いて、ついにスミス一行はモンブラン山頂へたどりついた。山頂では盛大なパーティを催し、歓びを爆発させたのである。こうした様子を下界から望遠鏡で多くの見物人が注視していたのであった。でも、スミスは猛烈な眠気に襲われ、疲労から目を閉じてしまった。モンブラン登山の記録では1786年に地元シャモニーの農夫が初登頂をしていたが、以後スミスが成功するまでの半世紀以上、45回しか登られていなかった。だがスミスの登頂後、急速にモンブランに対する人気が高まり、5年間隔で平均88回もの登攀がなされるようになった。[10]

『モンブラン・ショー』

1852年3月15日、満を持して『アルバート・スミスのモンブラン・ショー』（*Albert Smith's Ascent of Mont Blanc Show*, 1852）の初日を迎えた。会場の壁はスイス諸州の旗で飾られ、舞台中央にはスイスの山小屋が設えてあり、その前には小さな池があり、多くの小魚が放たれていた。そして小屋の周りを大理石で埋めアルプスの草木が植え込まれていた。バルコニーには「セーム皮、トウモロコシ、登山杖、ナップザックなどアルプスを連想させる品々」が所狭しと置いてあったのである。[11]（図1）

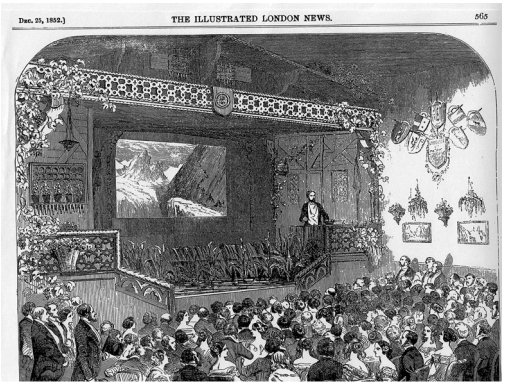

図1　公演中のスミス

イブニング姿に盛装したスミスは演壇に登場す

ると、すぐに小さな竪型ピアノへ歩み寄っていった。ピアノのうえには乗合馬車の模型、驢馬につける一組の鐘、長い筒のアルパインホルンなど旅の連想を誘う品々が置かれていた。スミスは前口上も一切語らず、ロンドンからドーヴァへ向かい海峡を渡り、ヨーロッパ大陸にまで進む。スミスの流暢な早口に乗せられて観客は、二、三分でスイスまで一気に移動していく。スミスの語り口調は会話体であるが、威厳にみち堂々としていて澱みなく流れるかのようであった。ジュネーブに到着すると旅に登場する老若男女が紹介され、単なる語りものにはせずに劇的な立体感を盛りあげようとする。口調も早口からゆっくりと変わっていく。スミスは全7シーズンを通じて回ごとにショーの内容に変化をもたせたが、ルートはほぼ一定していた。ジュネーブからレマン湖畔のシヨン城へ、そしてローマ時代の遺物が発掘されたマルティニ、次はセント・バーナード修道院へ寄り、シャモニーの渓谷へ辿り着くのであった。シーズンごとにシャモニーへ到着する前にパリ、ライン河、ナポリ、ポンペイ、ヴェスヴィオス火山などの旧蹟、景勝地へ寄り観客の旅情に訴える工夫をこらした。そしてスミスの背後ではパノラマが移り行く旅先ごとにその風景を映し出し効果を深めていく。スミスは逸話や文学作品を巧みに引用しながら物真似芝居を繰り出し、また旧聞新着のニュースを組み込んだ戯れ唄を歌い、独自の娯楽世界をつくりあげていった。[12]

幕間にもスミス一流の工夫があった。集客の手段として、スミスはセント・バーナード犬を『モンブラン・ショー』の小道具として用い、大いに宣伝効果をおさめた。三シーズン目を開幕したとき、会場エジプシャン・ホールの玄関先にスイス羊とセント・バーナード犬を配し、人々の注目を集めることに成功した。公演中はこの救助犬を幕間に登場させ、首からさげた籠に気つけ薬ならぬチョコレートを入れた袋を用意して子供たちに配る周到さをみせたのであった。この救助犬の一頭をアルバート殿下に、そしてもう一頭を小説家ディケンズに献上し、さらに巷の話題をよんだのであった。[13]

第二幕に入ると、スミスの独壇場でモンブラン登頂をはじめる。ここで登山に伴う危険と刺激を観客のなかにあますところなく浸透させ、笑いを誘う逸話と科学的知見を巧みに混ぜ合わせ、ヴィクトリア朝の観客がもっ

とも好む「娯楽と教養」の合一をみごとに演じてみせたわけである。そしてスミスの背後には風景画家ベヴァリーが描いたジュネーブからシャモニーまでの風景がパノラマとして提示され、情景から情景へと水平に動いていくのであった。第二幕からのボソン氷河、トレゼーロ氷河、夕陽のグラン・ミューレ、月光にうつし出されたグランプラトーなどのパノラマは、スミスの背後で登攀する方向と同じく垂直に動いていく。雪つもる露営地のうえに夕陽がそそぐジオラマのような情景に観客は固唾をのんで見守るばかりであった。前述したように、スミスの新機軸は、モンブランへの登攀が始まるとパノラマの場面を垂直に動かし出したところにあったのである。

モンブラン山頂で景色を楽しんだ後、下山にも周到な用意がなされていた。雪崩の恐怖をあおるばかりではなく、雪原の傾斜で橇遊びなどを楽しむような場面（図2参照）もふんだんに入れながら、観客を出発地シャモニーへと連れ戻していく。サービス精神が旺盛なスミスは、興奮した客を直接に英国へ帰国させようとはしない。パリへ寄り道し、レストランで外国語が苦手でフランス語会話集を片手にうまく注文ができないイギリス人観光客をつくりあげる。観客に微苦笑が浮かぶのはいうまでもない。帰路の短期滞在地としてイタリアのマッジョーレ湖などがよく選ばれたが、閉幕の言葉はいつも同じであった。1814年にパリで創刊された『ガリニャーニ・メッセンジャー』（*Galignani's Messenger*）という英字新聞があり、ヨーロッパ中でよく読まれていた。その新聞から適切な時事ニュースを引用し、スミスはそれを戯れ唄にのせて声高らかに歌いあげ、閉幕となるのである。[14]

このようなスミスの『モンブラン・ショー』は、ヴィクトリア朝において最大の興業となった。最初の2シーズンだけでも20万人もの観客が押し寄せ、閉幕する1858年まで7年間7シーズンもロングランし、2,000回以上という想像をこえる公演数を重ねたのであった。つとに1854年9月18日付の『タイムズ』紙は、このショーが「ウェストミンスター大寺院、セント・ポール大聖堂などと遜色ないロンドンの一大名所」[15]と化している旨を伝えていた。こうした人気をさらに高める機運のひとつをつくったのは、サザランド公爵夫人をはじめとする王侯貴族の参加があった。公演期間にスミス自らがガイドとなり、プリンス・オブ・ウェールズをシャモニーの氷河へ案内した。1853年の第2シーズン目にはアルバート殿下が来場し、またヴィ

クトリア女王の臨席をえた天覧興行は、ウィンザー城とワイト島のオズボーン宮において二度（1854年、1856年）まで行なわれたのである。小説家サッカリーは娘に宛てて『モンブラン・ショー』を観た感想を書き送っている――「痛快きわまりなく公演を通してあくびが出るようなことはなかった。これまでのどの公演よりも遜色がなく小説など物の比ではない」、と。[16]

エフェメラ

『モンブラン・ショー』の余波はエジプシャン・ホール内だけにはとどまらず、国民的な人気を博したというが、入場券をみるとボックス席半ギニー2シリング、ストール席2シリング、バルコニー席1シリングであった。[17] これはミドルクラス下層の人々にとってようやく手のとどく料金であろうが、労働者階級ではとうてい入場できない料金設定である。そこでスミスはショーにまつわるものを商品化として売り出したのである。こうしたエフェメラを子供の遊びとして簡単に無視してはならない。玩具が子供の世界に占める位置を考えれば、つまり多元的な社会・文化において下位文化が占める重要性を考慮すれば、『モンブラン・ショー』から派生した付属物にも文化史的意義が大いにあろう。

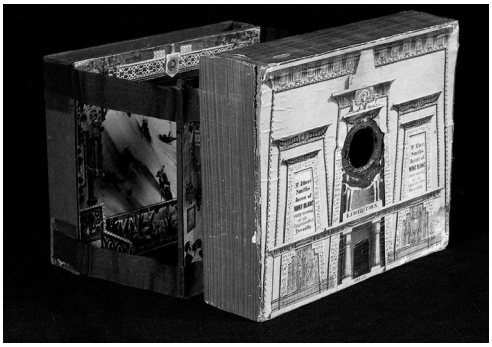

図2　模型パノラマ「モンブラン・ショー」

ショーの中心は山の王モンブランであったのでパノラマを模した玩具が誕生した。ロンドンのロイヤル・ポリテクニーク・インスティテューションに納品していたリヴァプールの業者アイザック・ノット社（Isaac Knott）が製作した幻燈機とウィリアム・ベヴァリーが描いた『モンブラン登頂』を模倣したスライドがある。[18] ヴィクトリア朝の視覚文化に寄与したステレオ・スコープの流行とともに、この小型パノラマにより『モンブラン・ショー』は家庭のなかにまで入り込んできたのであった。（図2）

また、簡単な紙細工の記念品もあった。折りたたんでいるときは一輪のバラの花片であるが、折りたたまれた花片を一枚ずつ開いていくと、モンブラン登頂までの道中が展開していき、八面すべてを開くと一輪のバラの花となる。まるで『モンブラン・ショー』が万華鏡のように展開される工夫がこらされている。安価であったため、スミスのショーへ行けなかった人々がパノラマ鑑賞の代用として購入したと思われる。鑑賞の記念としてパノラマが描かれた扇も販売されていた。[19]

『モンブラン・ショー』がゲーム化されたボード・ゲームがある。ピカデリーのエジプシャン・ホールを出発してからモンブラン登頂を経てシャモニーへ帰るまで、53の情景が盤上に描かれていて、参加者は36の点棒を与えられて四角ゴマをまわす。点数によって各所へ進み、また後退し、モンブランの頂上を制覇した者が優勝とみなされる。ドーヴァから海峡を渡るとき、船酔いしなければ6点が与えられる一方、セント・バーナード修道院へ入ると6点減点される。モンブランを登るときには雇用するガイド、杖に対する費用として各々点数を取られることになっている。[20] このボード・ゲームが人気を博したのは、高峰モンブランを征服することで大英帝国の国家意識を発揚したところにもあった。こうした玩具を介在させて『モンブラン・ショー』は幅広い人気を得て家庭へ浸透していったのである。

諷刺作家スミス

さて、『モンブラン・ショー』が成功した一端はスミスの表現力に起因していよう。スミスが弁士としてすぐれていたのは、ロンドン文芸界で百戦錬磨の文学活動を実践していたからにほかならない。[21] とりわけ『モンブラン・ショー』を実演するにあたりもっとも効力を発揮したのは、スミスの劇的な構成力であった。1842年9月、サリー・シアターで上演されたメロドラマ（*Blanche Heriot, or the Chertsey Curfew*）を書き、またフランス劇（*La Grâco de Dieu*）を翻案し、『シャモニーの真珠』（*The Pearl of Chamonix*）と題して上演して、『モンブラン・ショー』の礎を着実にかためていた。さらにスミスは1844年から46年にかけて、リクーム・シアターに絢爛豪華さを売りものにした演目を上演していた。こうした演劇に対する専門性を高く評価されたゆえに、スミスは『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』

の劇評担当者に抜擢されている。

演劇の卓越した表現力に加えて、スミスの人間観察の鋭さを忘れてはなるまい。創刊されたばかりの諷刺雑誌『パンチ』の寄稿者であり、サッカリーが描いた「俗物」シリーズの系譜にたつ、諷刺のきいた人物評はロンドン文壇の注目を一身に集めるところとなった。英国社会にあふれる紳士気どり、暇人などの生態を余すところなく伝えた『厭な人間の博物誌』(*The Natural History of Stuck-Up People*, 1847) と、リージェンシー時代の「ダンディ」像を下敷きにして、ヴィクトリア朝のジェントルマン像を哄笑した『上品な人士の博物誌』(*The Natural History of the Gent*, 1847) はその偽善ぶりをあばいてみせ、ミドルクラスの人々にとって格好の読み物となり、ベスト・セラーになったのである。[22]

そもそもスミスは幼少の頃からパノラマにとりつかれていた。わずか11歳の時、妹だけを観客にしてモンブランのパノラマを「実演」していたのである。そして20歳の頃、チャーツィーの図書館で後年の『モンブラン・ショー』の原型となる「モンブラン」公演を果たしていた。初期のパノラマ・ショーはスミスの巧みな語りゆえ多大なる人気を呼び地方巡業も数多くこなしたのだが、地方公演は順調に展開したわけではなかった。9歳のとき、ソーホーのバザールで買ってもらったモンブランが描かれている本『シャモニーの農夫』(*The Peasants of Chamouni: Containing as Attempt to Reach the Summit of Mont Blanc, and a Delineation of the Scenery Among the Alps*, 1823) は、スミスの心をとらえて離さなかった。その本のなかにはモンブランの雪崩に襲われ遭難したハメル博士一行の壮絶な最後が描かれていたからである。[23]『モンブラン・ショー』は風景美と死の恐怖が混在した幼き日に胸に刻んだアルプスを追体験したものであった。

鉄道、蒸気船の発達は英国からスイスまで、従来2週間は優にかかっていた旅程をわずか3日間ほどまでに短縮した。[24] こうした旅の利便性を背景にした『モンブラン・ショー』は、感性・美意識にも多大なる影響力をふるった。18世紀以来、ロマン派の人々が提唱し浸透した「崇高性」(sublime)、「ピクチャレスク」(picturesque) という、眼でもって眺め、鑑賞するといった受動的な美意識をかなぐり捨てさせ、歩行を駆使した登山という実践をうながす一助になったのである。1858年7月6日に閉幕する

まで2,000回以上の公演をこなした『モンブラン・ショー』は、パノラマや演劇興行を興隆させるのに大いに寄与したばかりか、山岳に対する、とりわけアルプスの峰々に対してヴィクトリア朝の人々の目を向けさせた功績は看過できまい。多くの知識人がアルプスの氷河を踏み、山頂を目指した。山岳への関心が深まり、登山が急速に実践された文化変容は注目に値するであろう。そして1857年に設立されたアルパイン・クラブは、ミドルクラスの社会的階層意識、国家的アイデンティティなどを再確認するひとつの装置として機能していくのである。

II　サンデー・トランプス

アルパイン・クラブ

不動産業者、土地鑑定士ウィリアム・マシューズ（William Mathews, 1828–1901）が英国山岳会の設立計画を打診した手紙（牧師F. J. A. ホート［Fenton J. A. Hort, 1828–92］に宛てた1857年2月1日付）のなかで立ち上げる会の概要[25]は、ほぼ決まっていたようだ。「クラブ員は年に一度集り、会食をしてスイスその他での山岳旅行について報告し、また年に一、二度発行する協会雑誌に山行を記録して会員に資するようにする」という趣旨であった。1857年11月6日、有志がバーミンガムのマシューズ邸に集まり、会員の選抜を行なったが、選ばれても何ら関心を示さない人もいた。探検家リチャード・バートン（Richard Burton, 1821–90）は世界の山岳地帯を渉猟したという理由で会員に選出されたが、断った一人であった。詩人マシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822–88）が選ばれた理由は、テオデュール峠へ一度氷河見物に行ったというものであったという。推薦され承諾した人々が1857年12月22日、コヴェント・ガーデンにあるアシュリ・ホテルに集まり、E. S. ケネディ（Edward Shirley Kennedy, 1817–98）を議長にして世界で初めての山岳会が設立されたのであった。[26] 三ヶ月のち、政治家ジョン・ボール（John Ball, 1818–89）が初代会長に選出され、数年後にはレズリー・スティーヴンや出版業者ウィリアム・ロングマン（William Longman, 1813–73）などが会長職を担なった。当初、入会条件は標高2,000マイル以上の高山に登っていることが義務づけられたが、資格委員会にゆ

だねられた結果、10人のうち1人でも賛成があれば入会が許可されるという緩やかな規約へと変更されていった。山岳会が社交的な集団にうつったのも無理はない。1858年2月3日、会の最初の晩餐会が開かれたが、出席者はわずか12名であった。[27]

アルパイン・クラブの設立を願ったマシューズが何ゆえに山岳会設立をもくろんだのか、その真意は定かではない。ただ、自らがバーミンガムで事業をつかさどり、五十以上もの公職につき、数え切れないくらいの肩書きをもつ典型的なヴィクトリア朝ジェントルマンであった。[28] そうした多忙きわまる人間には余暇の問題は切実であった。山岳会には高邁な理想がたしかにあったであろうが、何よりも心身を清冽な空気にさらしたいという切実な願望があったのではなかろうか。

英国山岳会の会員名簿（A. L. Mumm, *The Alpines Club Register 1857–1863*, 1923）は、設立された1857年から1863年までの間に入会した会員情報が詳しく記されている。それによると初期会員281名の内訳は、法曹関係者79名、聖職者34名、大学関係者22名、科学者5名、著述業4名、画家4名、建築家2名、軍人9名、医者8名、銀行関係者12名などに分類される。[29]「アルプスで人に出会ったら10人に1人は大学関係者で、8人に1人は（ほぼ）ケンブリッジ大学の教員であり、その半分は賭けてもよいがフェローである」[30]と冗談が言われるくらい大学関係者が多かったのも事実であるが、劣らず宗教関係者も多数を占めていた。ただ全会員のうち貴族につらなる者はわずか3名しかいなかったが、この会がミドルクラス以上の階層から成り立っていたことが分かる。そして会員の大部分が都市居住者であったことを忘れてはなるまい。協会誌『アルパイン・ジャーナル』（*Alpine Journal*）は1863年に創刊されたが、スティーヴンは1868年から72年まで編集長であり、サンデー・トランプスの中核メンバーとなるダグラス・フレッシュフィールド（Douglas Freshfield, 1845–1934）が1880年までその後を継いだ。そのタイトルページには会の趣旨（“A Record of Mountain Adventure and Scientific Observation”）が明記されている。

アルピニストとしてのスティーヴンを多くの人々が描いているが、詩人で小説家であったトマス・ハーディはその人物像をスティーヴン自らが初登頂したアルプスの高峰シュレックホルンと比較してとらえている。[31] 長

編小説（*Far From the Madding Crowd*）をスティーヴンが編集する『コーンヒル・マガジン』に掲載されたハーディは、1897年、スイス・アルプスのシュレックホルンと対峙し即座にスティーヴンを想起しソネットを書いた――「厳しく屹立した山の姿はまるでスティーヴンその人であった」。[32] シュレックホルンの「超然たる高き峰」を「細身で寂寞とした風貌」で「身体と生命を賭して」登攀したスティーヴンの姿がそこに描かれている。人を寄せつけず、孤高のうちに対象に挑んでいく姿こそ、同時代の作家、詩人たちが共通してスティーヴンに認めるところであった。[33]

不可知論者

1859年、スティーヴンはケンブリッジ大学トリニティ・ホールの特別研究員（フェロー）となり、同時に聖職者に叙せられた。だが聖書に書かれている記述、たとえばノアの洪水がどうしても信じることができなくなり、「疑わしき話」（'dubious stories'）と映るようになった。自らの信念に対してきわめて懐疑的になってきた。やがて虚偽を語ることを良心がよしとせず拒否するようになり、1862年、こうした圧迫に耐えられず大学を去った。神なきスティーヴンのまえに現れたのがアルプスの峰々であり、それは教会にかわる聖堂へとなっていったのである。「私にとって、ヴェンゲルンアルプは、山という聖域におけるもっとも聖なる場所なのである」と賞揚し、聖なるアルプスの山々を利己的な描き方をした詩人バイロンは無礼きわまりなく、許せないと批判したのであった。[34] アルプスの高峰はスティーヴンの精神を刺激し高揚させた。気高さと清々しさ、そして慈しみ深いものとみなされたアルプスこそ、スティーヴンにとって自己と対峙し、見つめなおす聖地であった。そしてアルプスの山々そのものが神の御業に思えてきたのである――「ユングフラウは混沌とした雄大な姿をとどめているが、人間の目では理解しえない精妙さをたたえていて、地上の建造物との比較などとうてい能わない」と神の偉大さを讃えているが、アルプスを彷徨してもついに創造主の正体をスティーヴンは得るところとはならなかった。[35] かつて拒絶した信仰の対象とおぼしきものをアルプスの山中で追い求め続けたのである。スティーヴンが不可知論者であるゆえんである。

「山岳と広野が織りなす光景のなかに、この世のものとは思えないもの

があり、明らかに山中の雲霧のごとく定めがたく、定かならぬ地平線のかなたへおぼろげながら去りゆこうとしているものがある。それは絶対的な永遠の沈黙により呪い封ぜられているかのようである」と、スティーヴンは初登頂したシュレックホルンをあたかも精霊にも似た姿でとらえている。そしてその山頂において、「静かに荒涼たる巌のうえに腰をおろし、見果てぬところにある平原の小さき陰影の皺襞を、まるで山脈が緩徐として移りゆく地質時代を通じて下降隆起するさまを想起して眺めていると、自らは永遠の存在であるかのように思われてくる」[36]と、スティーヴンはシュレックホルンと一体化していく。こうした体験こそがスティーヴンの「信仰」であった。

歩行の意味

ウォーキングを愛好するのは、まず「歩く」という行為そのものが単純で原初の本能に基づくものであったところによる、とスティーヴンは没後に発表された論考「ウォーキング礼賛」（'In Praise of Walking,' 1905）のなかで述べている。歩行するのに手の込んだ器具、装置は不要であり、それゆえに当時、流行していた自転車（サイクリング）、ゴルフ競技は、スティーヴンの基準に従えば、「劣る」とされた。[37] さらに身体が母なる大地とたえず接し、手つかずの自然とふれられるのも大いなる魅力であった。そうした歩行をしていると、どんなに単調な歩行であれ知性を刺激し歩調と同時に黙想が深まり想像力が活性化される。歩行のリズムと連動していくと、豊かな静寂が身をつつみ黙想に身をゆだねることができるのである。歩くことがいかに頭脳を活発にするかは、いつ（時間）、どこ（場所）を歩いたかという記憶が去らない事実と照らし合わせれば自明である。つまり歩行はある記憶と他の記憶を無意識のうちに継ぎ合せる結合力があり、同時にそれぞれの歩行が完結していて、歩行それ自体に「劇」が宿っており、それでいてそのドラマには連続したエピソードがあり大団円すら伴うという。だからスティーヴンによれば、ひとりで歩くことは沈思黙考を誘い、詩人、哲学者には最適の行為であった。そして偉大な作家はいずれも偉大な歩き手であったと断定してはばからない。

さらにスティーヴンは文学的営為と歩行の関係を追究している。「歩

け、小道を進んで行け」を自らの行動原理とするシェイクスピアは言うに及ばず、ロンドンからスコットランドまで歩いたベン・ジョンソンは驚くほどの健脚であった。同時代の旅行家トマス・コリアト（Thomas Coryate, 1577?–1617）はインドまで歩いて自らの宿願を果たした。日々、10マイル歩くことを日課としていたスウィフトは、ウォーキングが身体と精神を練磨することに気づいた作家であった。次にフィールディング、リチャードソンの具体例を紹介しながら、巨漢のジョンソン博士すら自らの憂鬱症を治癒するためリッチモンドからバーミンガムまで往復30マイルを歩き通したという。そして18世紀に勃興したロマン派文学こそウォーキングから再生された文学運動であるとスティーヴンは指摘する――湖水地方をたえず逍遥し詩作を重ね、アルプスでのウォーキング・ツアーにより新境地を開いたワーズワス、日に10マイルの距離を歩行し、都市を徘徊しながら自らの文学を創作したド・クィンシー、スコットランドで一日に35マイルを歩いたことがありワーズワスとともに歩き、かの『抒情民謡集』（*Lyrical Ballads*, 1798）を世に問うたコールリッジの例をあげていく。では跛足のためまともに歩くことができなかったバイロンをスティーヴンは、いかに評価していたのであろうか。クロスカントリーもかなわなかった詩人は鬱屈した気分を振りはらえず、病的な気質へと傾き、人間嫌いが高じて才能を半ばしかのばせなかった、とスティーヴンは評価を下している。次に歩行と哲学の関係が検討され、ホッブズ、ベンサム、J. S. ミル、カーライル、ラスキンなどの諸例が論じられていく。

スティーヴンが信奉するウォーキングの精神性は詩人ワーズワスへ遡源することができよう。ワーズワスは思索、詩作のため湖水地方を精力的に散策した。沈思して歩行とともに創作するその姿にスティーヴンは深い感銘を覚えていた。ただ歩く詩人に共感していただけで、湖水地方にある詩人の居宅を訪ねることなどには全く関心がなかった。[38]

さて、スティーヴンが遵守する歩行に不可欠な沈黙は、批評家ウィリアム・ヘイズリット（William Hazlitt, 1778–1830）の歩行態度と酷似している。ヘイズリットはウォーキングをするなかで一人になる、つまり孤独という要素をもっとも重要視する。「私は一人で歩くのが好きだ。室内で交際するのも悪くはないが、戸外では自然を友とすれば私はこと足りる。一人で

いるよりも人といっしょの方が寂しくないとは決していえない」と自然との深い関係こそ人間を避ける態度に通じる。「歩きながら話をするなどどこがいいのか、私には分からない。田舎にいるときには田舎同様にくつろぎたいものである」といった主張は自然への同化を意味する。だから徒歩旅行の真髄は自由（liberty）であるという。徒歩旅行に出るのは、「日常生活の自分を置き去り、他人のわずらわしさから」逃れるためであった。そしてヘイズリットは歩行と思索の関係を明解に説いてみせる。「誰かとともに歩いていると、必ず自然という書を解釈してやる労をたえずとらされる。道中では、私としては分析的なやり方より総合的な方法を好む。あるがままの印象を受け容れ、あとから調べ、詳細に分析してやれば十分ではないだろうか」と、自己が黙想するための歩行を最重要視した。[39] スティーヴンの歩行態度と酷似しているゆえんである。

サンデー・トランプス

ケンブリッジ大学時代、スティーヴンは徒歩会（Boa Constrictor Club）を組織し、会長をつとめていた。そして晩年、サンデー・トランプス（Sunday Tramps）をスティーヴンが提唱し、ジョージ・クルーム・ロバートソン（George Croom Robertson, 1842–92）、フレデリック・ポロック（Frederick Pollock, 1845–1937）の三人とともに創設者となり、ヴィクトリア朝後期の知識人が総勢60名以上もその会に参集し散策を繰り返した。フレデリック・ポロックはリンカンズ・イン司法裁判員（queen's remembrancer）であったが、オックスフォード大学コーパス・クリスティ・カレッジで法学を講じ、フレデリック・メイトランド（Frederick William Maitland, 1850–1906）と著した『英法史』（*The History of English Law before the Time of Edward I*, 1895）はイギリス法制史の古典となった。ジョージ・クルーム・ロバートソンは英国で初めての哲学研究誌『マインド』（*Mind*, 1876）の編集者であり、経験哲学の伝統に立ち、哲学と心理学を個別に専門化させ、哲学を学問研究の対象とすることに多大な寄与をした。さらに重要な会員であるダグラス・フレッシュフィールドは王立地理学会の会員であり、地理協会（the Geographical Association）の会長（1879–1911）を務め、1860年から1870年代にかけてモンブランを21回も登攀したアルピ

ニストでもあった。そして中心的な存在になるL. A. C.モリソン（L. A. C. Morison, 1832–88）はフランス文化、文学の造詣が深く、高級誌『サタデー・レヴュー』、『アシニーアム』の編集者であった。第1回目の散策は1879年11月2日、ポロック、ロバートソン、モリソンそしてフレッシュフィールドの4人がスティーヴンのもとに参集し、コーム・ウッドを散策した。[40]

サンデー・トランプスという散策会は15年間存続したが、厳密な規約は何もなかった。入会条件もことさらなく、10月から6月まで隔週の日曜日、指定された鉄道駅から歩きはじめ、20マイルから30マイルの道のりを歩き、任意の駅から各自、帰路につくというものであった。参加者が10名以上にならないようにスティーヴンは調整していた。歩くことに集中し、意味のない会話にふけることは厳格に慎まれたのである。一年のうち9ヶ月間、こうした散策は実行され1895年3月に解散するまで252回も実施された。ただ主宰者スティーヴンは健康上の理由からその任を1891年に辞し、ポロックが「チーフ」となった。それでもスティーヴンは断続的ではあるが1894年まで参加している。「質素な生活、高邁な思想」を信条とする会であったため、途中の休憩時に摂る食事はチーズとパンのみというきわめて質素なものであった。でも時折、チャールズ・ダーウィン、ジョン・ティンダル（John Tyndall, 1820–93）、フレデリック・ハリソン（Fredric Harrison, 1811–1923）などから招待され食事を饗応されている。メレディスは散策会の100回目を記念して、会員をボックスビルの自宅に招き、祝賀会を開いた。[41]

会員の弁護士A. J. バトラー（Arthur John Butler, 1844–1910）が書いた「サンデー・トランプスの唄」（‘The Ballade of Sunday Tramps’）がもっともこの散策会の起源と内実を示唆していよう。[42]

If weary you grow at your books
  Or dyspeptical after you’ve dined,
If your wife makes remarks on your looks,
  If in short you feel somewhat inclined
  For fresh air and a six hours’ grind
And good metaphysical talk—
  With a party of writers in *Mind*

You should go for a Sabbath day's walk.

この唄の第一スタンザから明らかなように、疲れた精神を開放すべく、「新鮮な空気」にふれ、6時間の散策の途中で「哲学談義」(metaphysical talk)を楽しむというものであった。メレディスはこの散策会に速記者が同行して、交わされた会話を記録していれば、どれほど裨益されたか分からないと述べているが、[43] ヴィクトリア朝後期を代表する知識人たちの交流がここにはあった。「哲学の語らい」と「散策」が巧みに押韻(*talk*, *walk*)されていて、サンデー・トランプスの内実を韻律により強調している。60名以上に及ぶサンデー・トランプスは数々の学問的業績をもたらしたが、メイトランド、ポロック、ヴィノグラドフ(Paul Cavrilovitch Vinogradoff, 1854–1925)の三者が折りなして生みだした成果こそもっとも誇れるものであった。

フレデリック・メイトランドとポール・ヴィノグラドフ

スティーヴンとメイトランドは、1880年4月4日に行なわれたサンデー・トランプスの散策会で初めて出会った。時にスティーヴンは47歳、メイトランドは30歳であった。ポロックを加えた散策会であったが、メイトランドはスティーヴンの人間性にふれ感激し、やがて人生の師表となった。[44] パブリック・スクールのイートン校を出て、ケンブリッジ大学を卒業したメイトランドは、リンカンズ・インの弁護士ベンジャミン・ロジャーズ(Benjamin Rogers, 1828–1910)のもとで法律の実務についていた。もともと法制史に興味があったので、スティーヴンと出会ってから一年内にウェールズ法に関する諸論文を発表している。やがてサンデー・トランプスの会を通じてフレデリック・ポロックと知己となり、[45] アングロ・サクソン時代から13世紀にかけてのコモン・ロー、訴訟文書を資料としてポロックと共著で『英法史』を著した。この大著は、法を理解するには社会、経済など日常生活への理解が不可欠であるという視点にたって書かれている。これはスティーヴンが哲学、文学を理解するのに必要とした社会学的な視座と同じである。さらにポロックを仲介して、イギリスへ研究にきていたロシア人ポール・ヴィノグラドフと遭遇し、その強い影響力によりイギリス法を専攻する決意をしたのである。それはドイツの法学者フリードリヒ・

カール・フォン・サヴィニー（Friedrich Karl Von Savigny, 1779–1861）がローマ法を研究した学風にたつ歴史法学を目指すものであった。1884年、指導教授である倫理学者ヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick, 1838–1900）の推挽によりケンブリッジ大学イングランド法講師に選ばれ、『グロースター刑事事件』（*Pleas of the Crown for the County of Gloucester*, 1884）を世に問うた。1887年、中世イギリスの法律家ブラクトンが蒐集した約2,000の判例を再検討した『ブラクトンのノート・ブック』（*Bracton's Note-Book*）を出版しヴィノグラドフの仮説を証明したばかりか、13世紀イギリス法の解明に資した。そして1888年、ダウニング講座教授に任命されたのである。ヴィノグラドフもまた論文「ブラクトンのテキスト」（'The Text of Bracton'）を『ロー・クォータリー・レヴュー』（*Law Quarterly Review*）へ寄稿している。[46] そしてヴィノグラドフは英国封建制村落のコミュニティを描いた名著『イギリスの隷農制』（*Villainage in England*, 1892）、英国における荘園形成史を追究した『イギリス荘園の成立』（*The Growth of the Manor*, 1905）などを著した。こうした知的交流をうながしたサンデー・トランプスは、メイトランドにとって学問のみならず人格形成に寄与した揺籃であった。

1884年5月11日、メイトランドとヴィノグラドフはオックスフォードで再会したが、メイトランドは外国人の口から英国中世の法律、社会史にまつわる資料、とくに訴訟記録が大量に手つかずのままでほぼ700年間も公記録所に放置されたままになっていることを聞かされ、驚愕したのであった。こうした文献資料から過去の生活を再現させることが十分に可能であることをメイトランドは推察した。翌日、切迫した気持ちでロンドン公文書館へ赴いたメイトランドは、自らの故郷であるグロースター州のもっとも古い文献の閲覧請求をした。すると1221年の資料が手渡され古文書学に不慣れにもかかわらず、メイトランドは解読し転写していった。ヴィノグラドフ宛の書簡（4月28日付）のなかで、[47] メイトランドは手がけている研究内容を報告しているが、ここで注意したいのは、ヴィノグラドフの示唆のもとメイトランドが仕事を進め、その論文をポロックが自ら編集している雑誌『ロー・クォータリー・レヴュー』に掲載しようとしている事実である。散策会に参加し、各々の専門分野を語り合って啓発され、ひとつの成果へと結実していく。メイトランド、ポロック、ヴィノグラドフといっ

た英知を終結させ、いわば一種の触媒作用の場を提供したのは、この散策会であった。7年後、メイトランドがヴィノグラドフに対して、「あの散策会でお会いできたのは千載一遇の幸せだった、とよく思います。そしてあの出会いこそが生涯を決定したのです」と感謝の念を吐露している。[48]

スティーヴンの没後、メイトランドは友情からスティーヴンの浩瀚な伝記（*The Life and Letters of Leslie Stephen*, 1906）を書いたが、その序文には「レズリー・スティーヴンには多くの良き友人がいた。本書を執筆するにあたり、少なくとも60名の知友が援助の手を差しのべてくれた」という謝辞がある。この60名という数字は、興味深いことにサンデー・トランプスの名簿[49]に記載されていた人数と一致している。

形而上学協会

スティーヴンを中心とするサンデー・トランプスの活動は形而上学協会（Metaphysical Society, 1869–1880）の動向と重複していた。スティーヴンに加えて散策会の設立メンバーであるフレデリック・ポロック、ジョージ・クルーム・ロバートソンの二人もこの協会に属していた。形而上学協会は、ヴィクトリア朝英国を代表する神学者、哲学者、科学者たちが参加した会で、1869年4月に設立され、6月には第一回の会合がロンドンのグロウヴナー・ホテルで開催された。11月から7月まで月に一度、会を開き事前に印刷した論考を配布し霊魂、自由意志、物質と精神、必然性などといった任意のテーマについて忌憚なく討議し、省察を加えた。マニング枢機卿（Henry Edward Manning, 1808–92）なども参加していたが、ダーウィン以後、信仰に対する疑念といかに対処すべきか、また科学と信仰の両立をいかに保つのかといった問題が論じられたのである。

この協会を設立したのはジェイムズ・ノールズ（James Knowles, 1831–1908）という建築家でありジャーナリストであった。『コンテンポラリー・レヴュー』（*Contemporary Review*, 1866）を編集し、『ナインティーンス・センチュリー』（*Nineteenth Century*, 1877）を創刊し、協会の会員から多くの寄稿を集めていた。アーサー王伝説への関心から詩人テニソンと親しくなり、[50] テニソンのサセックスにあるアルズワース邸を設計したが、神学と科学の対立という知識人の間で論争がくりかえされていた問題を好んで詩

のテーマとした桂冠詩人に協会の精神は依拠していたのである。現に第1回目の会合では会員のまえでテニソンの詩「聖杯」(‘Holy Grail’) が朗読された。テニソン、ノールズそして天文学者チャールズ・プリチャードの間では幾度となく宗教、倫理といった問題が論じられたが、それは1860–70年代の論壇でダーウィン、ハクスリー、ミル、スペンサーなどが論争していた問題と軌を一にしていたのである。そうした思想的背景のもと、広教会派のA. P. スタンリー (Arthur Penrhyn Stanley, 1815–81)、ユニテリアン派の主導者ジェイムズ・マーティノー (James Martineau, 1805–1900)、『スペクテイター』(*Spectator*, 1823) の編集者R. H. ハットン (R. H. Hutton, 1826–97)、『コンテンポラリー・レヴュー』の初代編集者ヘンリー・オールフォード (Henry Alford, 1810–71)、『ダブリン・レヴュー』(*Dublin Review*, 1836) の編集者W. G. ウォードたちの参加をえて形而上学協会は発足し、会員にはラスキン、グラッドストーンなどもいた。

テニソンは会にはほとんど参加しなかったが、その不在がかえって協会の核となっていた。つまり神と宇宙は一体化していて、神はつねに自然のなかに遍在するといったテニソンの汎神論が協会のなかで求心力を発揮していたからである。神学と哲学の混淆した議論にさらに科学を加えて、とりわけ科学対宗教といった問題が盛んに論じられた。協会は100回の会合を重ねたが95の論考が発表され90に及ぶ論文が印刷されたかたちで残っている。62名の会員のうち38名が各自の論考を読んだが、ハットン、スティーヴンの兄である王座裁判所判事ジェイムズ・フィッツジェイムズ・スティーヴン (James Fitzjames Stephen, 1829–94) が各々7回発表し、マニング枢機卿、アーサー・ラッセル (Arthur Russell, 1806–74)、ヘンリー・シジウィックが各々論文を6度読み、そして物理学者ウィリアム・ベンジャミン・カーペンター (William Benjamin Carpenter, 1813–85)、フレデリック・ハリソンが4回発表している。やがて協会は議論をしつくしたという理由でもって、1880年11月16日に解散したのであった。[51] サンデー・トランプスが形而上学的な議論を盛んに繰り返したのもこの協会との関係があったゆえである。

III　コモンズ保存協会

産業革命の余波が全国の隅々にまで浸透していったヴィクトリア朝後期、数多くの人々が休息と余暇を求めてカントリーサイドへ向かうようになった。こうした趨勢のなかで歩道（footpath）を歩く権利を擁護し、オープン・スペースを享受しようとする動きが出てきたのは自然なことであった。すでに1824年、ヨークでこうした歩く権利を前面に押し出して主張する団体（the Protection of Ancient Footpaths in the Vicinity of York）が創設され、続いて1826年、マンチェスターで同様な団体（the Manchester Association for the Preservation of Ancient Footpaths）が生まれた。そして1865年、ロンドン周辺にあるコモンズを保護するため、コモンズ保存協会（the Commons Preservation Society）が下院議員ジョージ・ジョン・ショー＝ルフェーヴル（George John Show-Lefevre, 1831–1928）、J. S. ミルなどを中心に設立されたのである。すでに1848年、その会員になる法学者であり下院議員ジェイムズ・ブライス（James Bryce, 1838–1922）は、国会へスコットランドの山々へアクセスできる法案（the Access to Mountains [Scotland] Bill）を提出している。こうした運動のなか多くの歩行団体がヴィクトリア朝後期に設立されたのは、決して偶然ではない。イングランドでは重要な2団体（the Forest Ramblers Club [1884], the Polytechnic Rambling Club [1885]）が設立され、続いて1892年、スコットランドでも歩行会（the West of Scotland Ramblers' Alliance）が創設されたが、サンデー・トランプス（1879）はこうした動向のなかにあったわけである。やがて1905年、全国に散在していた10以上の散策者団体が大きな同盟（the Federation of Rambling Clubs）を結成するところとなり、散策する権利（ramblers' rights）を訴える運動へと発展していったのである。こうした同盟の存在は、地方都市に同類の会を設立する動きとなっていく（Manchester Ramblers' Council [1919], Liverpool and District Federation [1922], Sheffield and District

図3　協会誌『ランブリング』

Federation [1926])。そして、1931年9月、全国的な統一組織(the National Council of Ramblers' Federations)が形成されるところとなったのである。翌年1932年4月24日、ダービーシャーで地主と「英国労働者スポーツ組合」(British Workers' Sports Federation)の会員である歩行者が衝突し、5人の逮捕者まで出すキンダー・スカウト事件(the Battle of Kinder Scout)が起きている。[52] そして最終的に1935年1月1日、「散策者協会」(the Ramblers' Association)が設立された(図3)。こうした歩く権利をめぐる運動のなかで「コモンズ保存協会」は、ロンドン周辺部からその運動がはじまり、全国へ波及していく推進力になったという意味で大きな意義がある。(表1参照)

エッピングの森

スティーヴンはサンデー・トランプスの記録を残しているのだが、ロンドン北東から南西エセックスに広がっているエッピングの森を散策した記述をみてみよう。かつての王侯貴族の猟場に足を踏み入れたスティーヴンの脳裏には想像力を喚起する原生林――征服王ウィリアムの、赭顔王(しゃがんおう)ルーフスことウィリアム二世(William II, d. 1100)のニューフォレスト、ロビン・フッドのシャーウッドの森など――が広がっていく。人間の手で整形、植林されたヨーロッパの森ではなく、樅の太い幹がすき間なく並び、樺、樫などの樹木が繁り、蛇行する空地(blades)を備えた森、換言すればウォルター・スコットの小説『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*, 1829)のなかに描かれた森林を切望する。山岳、海洋と同様に森は想像力をきわめて強く刺激するものであり、ロンドンから半時間のところに広がる静寂、無疵があふれる「アルカディアの断片」(a fragment of Arcadia)を惜しむものであった。そしてエッピングの森は詩人ジョージ・クラブ(George Crabbe, 1754–1832)の詩興を連想させるという。万年雪をいだいた高峰を歌うシェリーの音律からすれば、クラブの詩は泥をつみあげた堤のようなものであると酷評するが、その「平凡であるが率直で実体あふれるリアリズム」('homely, downright, substantial realism')こそ、この森にふさわしいというわけである。スティーヴンのこの評言はまさにエッピングの森を歩く感興を示唆している。[53]

スティーヴンが歴史、文学をしのぶ散策を愉しんだエッピングの森は、歩く権利という視点からみれば、大きな意味をもつ場であった。1878年に制定された「エッピング・フォレスト法」(Epping Forest Acts)は、森林におけるアクセス権と歩行権を宣言し、森林をオープン・スペースとしてとらえた意義は大きい。公衆のためのオープン・スペース確保、森林の売却・譲渡の禁止、採掘、伐採の監視などのためにロンドン市による管理委員会のオープン・スペースの保存、監視がなされるようになった。法的にみても、中世以来、国王がもつフォレスト権と土地所有者の権利は廃止され、利用権は公的なものに転換された意味はたしかに大きいといえよう。

コモンズ保存協会

1865年7月19日、世界で最初の環境保全団体であるコモンズ保存協会は、インナー・テンプルにある下院議員ルフェーヴルの部屋で、経済思想家ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1773–1836)、慈善家フォウェル・バックストン(Fowell Buxton, 1837–1915)、生物学者トマス・ハクスリー(Thomas Huxley, 1825–95)、『トム・ブラウンの学校生活』の著者であり、下院議員のトマス・ヒューズ(Thomas Hughes, 1822–96)、下院議員エドワード・ノース・バックストン(Edward North Buxton, 1840–1924)などにより創設された。後に賛同者として下院議員チャールズ・ディルク(Charles Dilke, 1843–1911)、経済学者、政治家ヘンリー・フォーセット(Henry Fawcett, 1833–84)などが参加したがもっとも重要な協会員として、後にナショナル・トラストを設立するオクテイヴィア・ヒル(Octavia Hill, 1838–1912)、ロバート・ハンター(Robert Hunter, 1844–1913)がいた。参加者から1,400ポンドの基金を集め会は発足したが、年間500ポンドの寄付が集まるだけであったため、土地などを買収する資金が足りなかった。[54] 協会に購入力がないため、ヒル、ハンター両者は限界を感じナショナル・トラスト設立へ向かったのであった。とは言えコモンズ保存協会は、ナショナル・トラストを生み出す母胎団体であった意義に何ら変わりない。

とりわけ土地保存を目的とする運動は、美しい景観を、とくに貧しい人々が清新な環境にアクセスできるように、1878年、オクテイヴィア・ヒルとその姉妹たちが「カール協会」(the Kyrle Society)を立ちあげた。こ

の協会はロンドンの由緒ある庭園の保全運動も手がけるようになったが、バッキンガムシャーのバーナムビーチ、ミドルエセックスのマーブルヒルなどの保存運動ではコモンズ協会と連携し事業を進めていった。コモンズ協会と連携した協会としては、「首都圏公園協会」(the Metropolitan Public Gardens Association, 1882) の存在を忘れてはならない。さらに「ロンドン運動場協会」(the London Playing Fields Society, 1925) とも連携している。

コモンズの危機

コモンズ保存委員会によれば、コモンズは、住宅建設に用いる土砂を限りなく採取するため、また塵を見境なく捨てるため汚染が進み、ハリエニシダ、シバなどの下草が燃えて火災を起して劣化の一途をたどっていた。加えて、ロマニーらの不法占拠、治安の悪化が進んでいた。こうした事態に対してコモンズの所有者である領主はなすすべがなく、誰もが対処できない状況に陥っていたのである。領主が早急にコモンズの囲い込みを実施してもとうてい打開できる現状ではなかった。また、鉄道の路線がコモンズ内に敷設されるようになってきたのもコモンズ崩壊の危機と直結した。一般の住居地、私有地よりもコモンズの土地が格安であったため線路用地として選ばれたのであった。領主側がコモンズの劣化を阻止すべき法的義務などないと訴えれば、一方のコモンズ使用者側は自らの要求は有効であり、コモンズを囲い込むのは違法であると訴え、両者の対立は深刻化するばかりで、融和するような兆しは一切なかった。そこで立ち上げられた委員会側は領主の土地を買い上げ住宅用地としてそれらを売却し、その余剰金でコモンズの残った土地の保全、管理をして還元したいという案を提示してきた。この案に対してルフェーヴルたちのコモンズ保存委員会はこの提案には妥当性がなく、依然としてマートン法 (the Statute of Merton) は機能しており、コモンズ囲い込みを阻止できると確信し一貫して主張した。ゆえに住民の農耕権、放牧権などが行使できるだけのコモンズを確保しておくならば、換言すれば、確保できない限り囲い込みは不法であるという裁定を下したのであった。何よりも注目すべきは、コモンズ保存協会の主張が1865年に立ちあげられた委員会に認められ、コモンズ内の土地を自由に横断し、移動できる「歩く権利」(right of way) が全面的に認められた

ことである。[55] そして委員会がオープン・スペースを享受する権利（right of enjoyment）を、コモンズに居住する人々以外に拡大し、ロンドン市民、イギリス国民までをも含むものと認めたのは画期的なことであった。[56] さらに委員会は農耕権のためコモンズの囲い込みを容認したマートン法を廃止し、コモンズ法に取り替えるべきであると提言した。コモンズ保存を主張する委員会の提案は国会において2対1の票決により可決され、1866年の「首都圏コモンズ法」（the Metropolitan Commons Act, 1866）成立の布石となった。この法案によりロンドン市内のコモンズの囲い込みは事実上、不可能になったのである。[57] 結果、全国に点在するコモンズの領主たちは自らの囲い込みの実行性を証明するため数多くの訴訟が起きたのであった。

1845年、「囲い込み法」（the General Enclosure Act, 1845）が成立したが、それによると入会権（いりあいけん）保有者の三分の一が必要とする場合、同会が定めたときまたは一万人以上の人口がある町から8キロ以内にコモンズが位置している場合に限り、囲い込みが許可された。その結果、1845年から64年にかけてのほぼ20年間で、945ヶ所の土地で614,000エーカーが囲い込まれた。一般大衆のためにはわずか1,742エーカーと2,220エーカーしか割り当てられなかった。前者はレクリエーション用として、後者は労働者の庭園として用途が規定された。だが、こうした囲い込み地も積極的に活用されなかったため、とりわけ大都市周辺の囲い込まれたコモンズは荒廃の一途をたどり、領主の無関心さも加わり、塵捨て場と化し、治安も悪くなり、前述したような状態になったわけである。ところがこうした誰も見向きもしなかった土地がにわかに脚光をあびるようになってきた。それは都市人口の膨張により、これらのコモンズが住宅用地に転換されようとしていたからである。そうした傾向はロンドン周辺部で著しく速度を増していた。まず、脅威にさらされていたパトニー・ヒース（Putney Heath）、そして隣接するウィンブルドン・コモン（Wimbledon Common）が住宅地に転売されようとしていたため、緊急の対応が求められていた。[58] そこで、ルフェーヴルはウィンブルドン・コモン管理委員会（the Committee of Commoners）の一員になり、「歩く権利」も含む保護すべき公衆の権利を守るため奔走するところとなった。

ウィンブルドン・コモンズのコモンズ売却問題もかなり紛糾したが、領

主スペンサー卿はコモンの全権利を8名の管理委員に譲渡した。委員の内訳は地方税納付者から選定された5名、内相、陸軍大臣、建設省長官から選ばれた3名から成り立っている。譲渡報酬としてスペンサー卿とその法定相続人へ終身年金を渡すが、その額は領地から譲与される1,200ポンドとする。そしてこの額は、ウィンブルドン・コモンズとパトニー・ヒースから四分の三マイル内にある、年間35ポンド以上を納税する居住者から徴収するものとする。最寄りの道路、歩道からもっとも近い距離によって最高率を定めるが、四分の一マイルの住居は6パーセント、二分の一マイルでは4パーセント、そして二分の一マイル以上では2パーセントの割合とした。管理委員会の選定は地方税納付者により三年ごとに行なわれたが、コモンの保全は近隣住民の主意によって決められ、前述のように距離の割合により税額が決定されたのである。

領主と住民間の争いは沈静し、コモンの保全は運営管理する人々が担当していたが、問題がないわけではなかった。たとえば、ナショナル・ライフル協会（the National Rifle Association）がコモンの大部分に垣を巡らし、射的を立てるのを委員会は認可する義務があったのである。だが、そうしたことも数年間しか続かずやがてライフル射撃場は廃止になり、ウィンブルドン・コモンは人々のレクリエーションに供されることとなった。想像されるように管理委員会の方針がコモンの居住者にことごとく認証されるというわけではないが、総体的にみてコモンの管理は円滑に運営されているようだ、と総括されている。[59]

コモンズ保存協会の理念を拡大し、実現化したもっとも重要な団体はナショナル・トラスト（the National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty）であろう。1895年、ヒル、ハンターたちが土地、建物の保存を意図してこの団体を設立したが、大衆が活用し享受するため歴史的な意義があり、自然美に富む土地、建造物を取得するという一点において、コモンズ保存協会と理念がかなり重なるところがあった。都会の労働者たちにカントリーサイドの広大で清浄な空間を与えたいと願って運動を進めたコモンズ保存協会の意志は、奴隷解放論者、刑務所改革論者、住宅改良論者たちのそれと同根であり、事実、そうした会、協会に多くの会員が属していた。ただウォーキングクラブの多くが女性をメンバーに加えること

をことごとく拒否したのに対して、コモンズ保存協会には発足時より多くの女性会員が存在し原動力となっていたことを指摘しておかなければならないであろう。

おわりに

パノラマ興行師アルバート・スミスと思想家レズリー・スティーヴンが同じアルパイン・クラブに属していたという事実は、ヴィクトリア朝中期に突如として起きたアルプス登山という複合的な現象を物語っているかのようである。前者はモンブラン登攀以外には歩行については何も語っていないが、パノラマ・ショーという触媒を介して登山という運動にイギリス人を開眼させた。後者は歩くという営為でもって自己を追究していった。「軽視していない探求のひとつにウォーキングがあり、自己満足を覚えながらもあの夏の日のことを想い出す。それはアルパイン・クラブでの会食に出席するためロンドン・ケンブリッジ間50マイルを12時間で歩いたことがあった」と自らの脚力を誇っているが、スティーヴンにとって歩くことは身体よりも精神に根ざしていた。スティーヴンの学友でケンブリッジ大学初代経済学教授であり、後に郵政相となったヘンリー・フォーセットをスティーヴンは尊敬してやまなかったが、それは健脚であったことにあずかっている。「フォーセットは強靭な歩き手であった」と、スティーヴンは大学時代を回想し、「日々の散策こそ生活に不可欠（constitutional）である、とケンブリッジ大学関係者は信じて疑っていなかった」と述べ、友人フォーセットの歩行を克明に語っていく。1858年、25歳のとき、フォーセットは銃の誤射事故で失明してしまう。視力を失ってもフォーセットは兄弟で隊列を組み、その間に入り自らの足で歩んでいくことを断念しなかった。盲目であるがゆえ歩くには指示を授けてもらうのが自然であるが、フォーセットはむしろ主導する立場に立った。後年、ケンブリッジ周辺の平坦な道を「老人の歩く道」であると退け、丘陵、しかも太古アルビオンに生息していたという巨人ゴグマゴグ（the Gogmagogs）のごとき荒れた丘を駆け上がるのを好んだ、とスティーヴンは伝えている。スティーヴンはフォーセットに対して人間として全幅の信頼をおいていたが、それは「ウォーキ

ングへの傾倒によってその人物の徳、人格をはかる」のをスティーヴンが常としていたからである。ウォーキングはまさにスティーヴンにとって人生の指標となっていた。[60]

そしてメレディスは歩く人としてスティーヴンをサンデー・トランプスが開始された年に発表した小説『エゴイスト』(*The Egoist*, 1879)のなかで、「太陽神アポロンが断食した修道士に変身した」姿としてとらえ、「痩躯で健脚な学者」を表象しようとした。「いつもの長い散歩に出て留守だった」というように、スティーヴンをもとに造形された作中人物ウィットフォードはたえず「歩く」という行動とともに並置、明示されている。作品のなかで、「今日はどれくらい歩かれたのでしょうか」と尋ねられたウィットフォードは「9時間30分は歩きました」[61]と応えている。さらにスティーヴンの姿は娘ヴァージニア・ウルフの小説『燈台へ』(*To the Lighthouse*, 1927)のなかで哲学者ラムジー氏となり、「歩く人」としての意味が重層化されている。

スティーヴンはウォーキングを実践するとき、ほとんど言葉を発さず、同行者とも口をきかなかったという。[62]「あても無く歩きまわり(potter)、逍遥する(stroll)ことは、父の口から出ると大きな意味をもっていた」として、父親の生き方と歩く行為とが等価であったとヴァージニア・ウルフは回想記のなかで指摘している。スティーヴンの歩行の特徴は、寡黙なところにあった――「終日、荒野を歩きまわっても同伴者には一言、二言しか言葉をかけなかった」という。だが、その沈黙の間からもれる「低い声でいきなり述べる意見はじつに効果的」であった。つまり、「言葉は少ししかもらさなかったが、奇妙な力をもっていた」のだが、その力の原動力になるのは「沈黙の背後に広がっていた多くのこと」があったからである。そして同時にスティーヴンの沈黙は、明晰な思考を生み出し、逆に「感情を強く表現する」手段でもあったのだ。ものを書く方法として、父は娘に、「できるだけ少ない語数で、より明確に自らの意味することを正確に書くこと」という助言を与えた。歩行のとき、かたくなに沈黙をまもる意味がここでより明瞭になってくる。スティーヴンの沈黙は、「すぐれた学識と広大な経験をそなえた人間の教え」を何よりも暗示していたのである。[63]

登山や散策による歩行によって、スティーヴンはすぐれて耐久力を養う

ことができた。そうした持久力をもっとも発揮できたのは、ヴィクトリア朝の出版のなかでも最大の事業に数えられる『英国伝記辞典』(*Dictionary of National Biography*)の編纂、刊行であろう。1882年12月23日、ヴィクトリア朝学術文化の記念碑ともいえる伝記辞典(*A New Biographia Britannica*)の刊行が発表され、編集方針も明確になった。故人となった大英帝国の著名人をABC順に掲載し、日時、諸事実、参考文献を各項目とも明記することにした。対象者をめぐる思想的な論説、性格分析などは不可とされたが、個人を彷彿とさせる逸話は許容された。毎年4月、10月に掲載予定のほぼ千名からなる人名リストを『アシニーアム』にかかげ、さらに読者からの候補者の推薦を募った。1885年1月1日、第1巻が刊行され、3ヶ月ごとに1900年まで一度も遅延することなく刊行が続いた。1891年6月、スティーヴンは健康上の理由から編集長の任を退く。その後、シドニー・リー(Sydney Lee, 1850–1926)が編集長となり1900年5月25日、最終巻である63巻を出版し完成をみた。全29,120項目は総勢653名に及ぶ寄稿者の尽力(ほぼ100名の寄稿者が全体の四分の三を書きあげていた)によるが、スティーヴン自身は署名がある記述だけでも378項目、1,000ページ以上、2巻分を執筆している。ドイツ、フランス、イタリアなどでは国家的な事業として遂行された編纂作業を個人の力で完遂したこと[64]は、何よりも驚異であるが、こうした浩瀚な辞書であっても「面白く読めるようなもの」[65]をめざしたスティーヴンに、聖なるアルプスを同時にプレイグラウンドと称したのと同じ精神を見ることができよう。

スティーヴンはルフェーヴルと同じコモンズ保存協会に属し、「歩く権利」をはじめ環境保全にも尽した。ルフェーヴルは、コモンズの保存を半世紀以上訴えてきた報告書の最後で囲い込みによる悲劇を歌ったオリヴァー・ゴールドスミス(Oliver Goldsmith, 1730–74)の詩『廃村』(*The Deserted Village*, 1770)から、「富者の息子たちは柵のない土地を分かち合い、〔貧民には〕草も生えないコモンすら与えられない」("Our fenceless fields the sons of wealth divide, / And e'en the bare-worn common is denied.")という詩句[66]を引用して、自然環境は万人が享受できなくてはならないと強調している。

＊ 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第17回大会（関西学院大学、2017年11月18日）での特別講演「ヴィクトリア朝のウォーキング」の原稿に加筆修正を施したものである。

注

1 Pierce Egan, *Sporting Anecdotes* (London: Sherwood, 1820), pp. 209–24. Walter Thom, *Pedestrianism: or An Account of the Performances of Celebrated Pedestrians during the Last and Present Century: with a Full Narrative of Captain Barclay's Public and Private Matches; and an Essay on Training* (Aberdeen: D. Chambers, 1813) pp. 101–204. Peter Radford, *The Celebrated Captain Barclay: Sport, Money and Fame in Regency Britain* (London: Headline book, 2001), pp. 1–14.

2 Leslie Stephen, 'Captain Barclay,' *Dictionary of National Biography*, vol. 1 (1885).

3 John Ruskin, *The Works of Ruskin*, ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn (London: George Allen, 1902–12), XXXVI, p. 117.

4 Walter Benjamin, *The Writer of Modern Life: Essays on Charles Baudelaire*, edited by Michael W. Jennings (Cambridge Massachusetts: Harvard University Press, 2006), pp. 80–81. *Ibid*., p. 99. "Charles Dickens' constant peregrinations began in his childhood. Whenever he had done drudging, he had no other resource but drifting, and he drifted over half London. He was a dreamy child, thinking mostly of his own dreary prospects. . . . He walked in darkness under the lamps of Holborn, and was crucified at Charing Cross. . . . He did not go in for 'observation,' a priggish habit; he did not look at Charing Cross to improve his mind or count the lamp-posts in Holborn to practice his arithmetic. . . . Dickens did not stamp these places on his mind; on these places." Walter Benjamin, *The Arcades Project*, translated by H. Eiland and K. McLaughlin (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999), pp. 233–34. A. N. Cooper, *The Tramps of the 'Walking Parson'* (London: Walter Scott, 1905), *With Knapsack and Note-Book* (London: Brown, 1907), *Walking as Education* (London: Headley, 1910).

5 中島俊郎「ウォーキングの文化史―イギリス人はいかに歩き、何を生み出したか―」（『甲南大学紀要文学編 164』, 2014）, pp. 59–77.

6 Richard D. Altick, *The Shows of London* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1978), pp. 204–6. R・D・オールティック『ロンドンの見世物』小池滋監訳（国書刊行会, 1990）, III, pp. 111–16.

7 Ralph Hyde, *Panoramania!: The Art and Entertainment of the 'All-Embracing' View* (London: Trefoil Publications / Barbican Art Gallery, 1998), p. 133.
8 Erkki Huhtamo, *Illusion in Motion: Media Archaeology of the Moving Panorama and Related Spectacles* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 2013), pp. 215–26.
9 Ralph Hyde, *op. cit*., pp. 131–35.
10 Albert Smith, 'Mont Blanc,' *Bentley's Miscellany* (January, 1852), pp. 35–55. Alan McNee, *The Cockney Who Sold the Alps: Albert Smith and the Ascent of Mont Blanc* (London: Victorian Secrets, 2015), pp. 116–24. Peter Hansen, 'Albert Smith, the Alpine Club, and the Invention of Mountaineering in Mid-Victorian Britain,' *Journal of British Studies*, 34 (1995), p. 300.
11 *Illustrated London News* (25 December, 1852), p. 565. Richard D. Altick, *op. cit*., p. 476. R・D・オールティック『ロンドンの見世物』*op. cit*., pp. 299–303.
12 Alan McNee *op. cit*., p. 145. Raymond Fitzsimons, *The Baron of Piccadilly: The Travels and Entertainments of Albert Smith, 1816–1860* (London: Geoffrey Bles, 1967), pp. 109–22.
13 Alan McNee, *Ibid*.
14 Alan McNee, *Ibid*., p. 137.
15 *Times*, 'Albert Smith's Mont Blanc' (December 6, 1853), p. 10. Raymond Fitzsimons, *op. cit*., pp. 109–22.
16 'Letter to Anne and Harriet Thackeray,' 6 August 1852, in *Letters and Private Papers*, III.
17 Alan McNee, *op. cit*., p. 137.
18 Ralph Hyde, *op. cit*., p. 162. Erkki Huhtamo, *op. cit*., pp. 226–28.
19 Ralph Hyde, *Ibid*., pp. 148–49.
20 Ralph Hyde. *Ibid*, p. 162, p. 163. Peter Hansen, *op. cit*., p. 307.
21 M. H. Spielmann, *The History of "Punch"* (London: Cassell, 1895), pp. 303–306. Arthur William à Beckett, *The à Becketts of "Punch": Memories of Father and Sons* (London: Constable, 1903), p. 236, pp. 258–60. Nigel Cross, *The Common Writer: Life in Nineteenth-Century Grub Street* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), pp. 107–8.
22 A. L. Mumm, *The Alpines Club Register 1857–1863* (London: Edward Arnold, 1923), III, pp. 294–95.
23 *The Peasants of Chamouni: Containing as Attempt to Reach the Summit of Mont Blanc, and a Delineation of the Scenery Among the Alps* (London: Baldwin, Cradock, and Joy, 1823), pp. 141–42. Albert Smith, *The Story of Mont Blanc* (London: David Bogue, 1853), pp. 1–2. "Twenty-seven years ago — when children's books

were rare presents, and were so prized, and read, and read again, until the very position of the paragraphs was known by heart — I had a little volume given to me at the Soho bazaar, called 'The Peasants of Chamouni', which told, in a very truthful manner, the sad story of Dr. Hamel's fatal attempt to reach the summit of Mont Blanc in 1820. My notions of the Alps at that time were very limited. . . The little book, which I have said had a great air of truth about it, made a deep impression on me: I do not think that 'The Pilgrim's Progress' stood in higher favour and this impression lasted from year to year."

24 Jill Steward, 'Alps,' *Literature of Travel* and *Exploration* (New York: Fitzroy Dearborn, 2003), I, pp. 14–16. Andrew Beattie, *The Alps: A Cultural History* (Oxford: Oxford University Press, 2006), pp. 161–63. Jerome Hamilton Buckley, 'The Anti-Romantics,' *The Victorian Temper: A Study Literary Culture* (London: George Allen and Unwin, 1951), pp. 14–40.

25 Ronald Clark, *The Victorian Mountaineers* (London: B. T. Batsford, 1953), p. 79.

26 *Ibid*., p. 81.

27 A. L Mumm, 'History of the Alpine Club,' *Alpine Journal* (1921–22), XXXIV, pp. 1–18.

28 Ronald Clark, *op. cit*., pp. 78–80.

29 Peter H. Hansen, *The Summits of Modern Man: Mountaineering after the Enlightment* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2013), pp. 182–86.

30 David Robertson, 'Mid-Victorians among the Alps,' *Nature and the Victorian Imagination*, ed. U. C. Knoepflmacher and G. B. Tennyson (Berkeley: University of California Press, 1977), p. 120.

31 Leslie Stephen, *Playground of Europe* (Oxford: Blackwell, [1871]1936), pp. 18–19.

32 Frederick Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen* (London: Duckworth, 1906), p. 278. W. A. B. Coolidge, 'The Schreckhorn in Winter,' *Alpine Studies* (London: Longman, 1912), pp. 117–18.

33 Noel Annan, *Leslie Stephen: The Godless Victorian* (London: Weildenfeld & Nicolson, [1951]1984), p. 144.

34 Leslie Stephen, *Playground of Europe*, pp. 64–76. Arnold Lunn ed., *The Englishman in the Alps* (London: Oxford University Press, 1913), pp. viii–ix. "Whymper certainly captured the romance of mountain adventure, but the rarer gift of describing mountain scenery is only his in a lesser degree. His famous description of the view from the Matterhorn is only a tiresome catalogue of things seen. *Mutatis mutandis* it would apply equally well to any

other summit view. Contrast it with the effortless magic of Leslie Stephen, who, with a few deft touches, carries you with him to the Schreckhorn cairn."

35 *Ibid*.

36 *Ibid*., pp. 18–19.

37 Leslie Stephen, 'In Praise of Walking,' *Studies of Biographer* (London: Smith Elder, 1898–1902), IV, pp. 254–60. Anne D. Wallace, *Walking, Literature and English Culture: The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century* (Oxford: Oxford University Press, 1993), pp. 194–99. Richard Reeves, *John Stuart Mill: Victorian Firebrand* (London: Atlantic Books, 2007), pp. 73–74.

38 *Ibid*., p. 271.

39 William Hazlitt, 'Going a Journey,' *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. P. P. Howe (London: J. M. Dent, 1931), VIII, pp. 181–89.

40 Frederick Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen*, p. 64. "We begin to get nearer the core of the man when we read of undergraduates swept out for long Sunday walks after early chapel. 'We walked so far and so fast that I had sometimes to go to bed when I came home, instead of going to supper,' Mr. Bayford, who says this, adds that the walking society was called the Boa Constrictor Club, and that Stephen, its president, was nicknamed the Old Serpent." *Ibid*., pp. 360–61. 例えば、*Mind* 誌へのスティーヴンの寄稿は以下の通りである。[On the use of the word "speculatist"], III (1878), p. 294. "Philosophic Doubt," V (1880), pp. 157–181. "On Some Kinds of Necessary Truth," XIV (1889), pp. 50–65, pp. 188–215. "Henry Sidgwick," XXVI (1901), pp. 1–17. 以上のような話題が散策のなかで語られていたことは想像に難くない。

41 James Sully, 'Reminiscences of the Sunday Tramps,' *Cornhill Magazine* (1908), p. 24, pp. 76–78. Harvey Taylor, 'Early Walkers,' *A Claim on the Countryside: A History of the British Outdoor Movement* (Edinburgh: Keele University Press, 1997), pp. 60–67.

42 Frederick Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen*, pp. 358–59.

43 George Meredith, 'Leslie Stephen,' *The Author* (April, 1904), p. 1. James Sully, 'Leslie Stephen,' *My Life and Friends: A Psychologist's Memories* (London: Fisher Urwin, 1918), pp. 296–315. George Meredith, *The Letters of George Meredith*, edited by C. I. Cline (Oxford: Oxford University Press, 1970), II, p. 658.

44 Frederick Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen*, p. 355.

45 H. A. l. Fisher, *Frederick William Maitland: A Biographical Sketch* (Cambridge: Cambridge University Press, 1910), pp. 72–86.

46 Cecil H. S. Fifoot, *Pollock and Maitland* (Glasgow: University of Glasgow,

1971), pp. 5–26. S. F. C. Milson, 'Introduction' to Frederick Pollock and F. W. Maitland. *The History of English Law before the Time of Edward I* (Cambridge: Cambridge University Press, [1895] 1868), I, pp. xxiii–lxxiii. Leslie Stephen, *Selected Letters of Leslie Stephen 1882–1904*, ed. John W. Bicknell (Columbus: Ohio State University Press, 1996), II, pp. 431–33. John Pollock, *Time's Chariot* (London: John Murray, 1950), p. 56, pp. 58–59.

47 H. A. L. Fisher, *op. cit*., p. 50. Mark DeWolfe Howe ed., *Holmes-Pollock Letters: The Correspondence of Mr. Justice Holmes and Sir Frederick Pollock 1874–1932* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1941), pp. 60–61.

48 Frederick Maitland, *The Letters of Frederick William Maitland*, edited by C. H. S. Fifoot (London: Selden Society, 1965), p. 94. "I often think what an extraordinary piece of luck for me it was that you and I met upon a 'Sunday tramp'. That day determined the rest of my life. And now the council of the University has offered me the honour of doctor 'honoris causa'. I was stunned by the offer for it is an unusual one and of course I must accept it. But for that Sunday tramp this would not have been." C. H. S. Fifoot, *Frederic William Maitland: A Life* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1971), pp. 56–58.

49 Frederick Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen*, p. 500. Leslie Stephen, *The Mausoleum Book*, edited by Allen Bell (Oxford: Oxford University Press, 1977), pp. 75–76. Frederick Maitland, *The Letters of Frederick Maitland*, pp. 382–83. "My acquaintance began when F. P. took me for 'a Sunday tramp' Pollock now says that I appeared in a high hat, but that I had forgotten — and as acquaintance ripened he took me home to supper and I found a wife, and (between ourselves) I think that 'the philosopher' as we used to call him, did a little match making, for which I am grateful. There were sides of him which few saw. He was for one thing a most tender hearted man and would suffer torments — almost amusing to the onlooker — if he thought that he had given pain by what wrote to some well meaning creature — and all this would come out in strong language about himself and his victim. I don't think that people who stood outside would guess this."

50 Alfred Tennyson, *The Letters of Alfred Lord Tennyson*, edited by Cecil Y. Lang and Eagan F. Shannon, Jr. (Oxford: Oxford University Press, 1987), II, pp. 505–506, p. 517.

51 Alan Willard Brown, *The Metaphysical Society, Victorian Minds in Crisis, 1869–1880* (New York: Columbia University Press, 1947). R. H. Hutton, 'The Metaphysical Society: A Reminiscence,' *The Nineteenth Century* (15 August,

1885), pp. 177–96.

52 'Editorial' to *Rambling: The Journal of the National Council of Ramblers' Federations* (June, 1933), p. 1. "*Rambling* is to inform you of all ideas, projects, policies and Acts of Parliament which will help or hinder you in your walking: not physical projects, or routes across country, or rucksacks, or the way to put your legs down, but all national schemes and ideals, all that is common to all of the district federations, and all which needs our common action — and that common policy by which, on the right occasion, we can put our *foot* down. For there is a great volume of public opinion to-day, if we can catch it and collect it and direct it, on such matters as rights of way, regional planning, preservation of natural and national beauty, access to mountains, national parks." Tom Stephenson, *Forbidden Land: The Struggle for Access to Mountain and Moorland* (Manchester: Manchester University Press, 1989), pp. 229–31.

53 Leslie Stephen, 'Peripatetic,' *Pall Mall Gazette* (12 June 1880), p. 14. Leslie Stephen, 'Vacations,' *The Cornhill Magazine* (1869), XX, pp. 213–14. "Vacations are less a time of enjoyment than a time of general consent to be bored under a hollow show of enjoyment. The best hope for many of us is that by pretending very hard, the pretence may come to have a sort of secondary reality; and as a large part of the pleasure derived from any pursuit consists in the recollection of our performances, and in the stories which they enable us to repeat to our friends, that satisfaction is open to those who never really enjoy the original pleasure, but believe in their own assertions after they have made them half-a-dozen times."

54 David Evans, *A History of Nature Conservation in Britain* (London: Routledge, 1992), pp. 40–41, pp. 44–46.

55 Lord Eversley, *Commons, Forests and Footpaths: The Story of the Battle during the Last Forty-Five Years for Public Rights over the Commons, Forests and Footpaths of England and Wales* (London: Cassell, 1910), pp. 24–25. "The rights of the public at large are vague and unsatisfactory, for while it is generally acknowledge that *a right of way may exist to traverse any of these spaces at will in all directions, and that no action for trespass would lie for such traversing* and even that a 'servitus spatiandi' over open ground which has in some measure been devoted to public use is also intelligible and known to the law, yet the legal authorities appear most unwilling to admit any general public right to exercise and recreation upon any of these spaces although such right may from time immemorial have been enjoyed, contending that it must be limited to some certain defined body of persons, as the inhabitants of a particular parish or the tenants of a particular

manor." [italics mine]　他人の土地をも歩くことができる、世界でも類例がないイギリス独自の「歩く権利」は、イギリス文化のなかでもきわめて特異な位置にある。その法的展開については、J. F. Garner, *Rights of Way and Access to the Countryside* (London: Oyez Publishing, 1974), pp. 8–17. を参照のこと。また、コモンズにおける諸権利をめぐる史的展開については、Paul Clayden, *Our Common Law and History of Common Land and Village Greens* (Henley-on-Thames: Open Spaces Society, 2003), pp. 47–59. が詳しい。そして「歩く権利」をめぐる法的規制、判例、各地の事例については、John Riddall and John Trevelyan, *Rights of Way: A Guide to Law and Practice* (London: Open Spaces Society, 2007) がもっとも網羅的であり、Commons, Open Spaces and Footpaths Preservation Society と Ramblers' Association という「歩行」運動に関連する二大団体が監修している。また、Marion Shoard, *A Right to Roam* (Oxford: Oxford University Press, 1999) は、アクセス権とフットパスなど道路について論じている。

56 *Ibid*., p. 25. "The Committee remarked: The opinions so expressed (as to the soundness of which, however, your Committee give no opinion) have proceeded from judicial decisions of ancient date; your Committee cannot help observing that, even if binding on legal tribunals, they appear to rest upon no very intelligent principle. Your Committee are at a loss to conceive why, upon general principles, a right of enjoyment which may be acquired by the inhabitants of a small hamlet should be denied to the inhabitants of the metropolis, or even to the general public... It may deserve consideration whether some declaratory law should not be passed to remedy what appears to us to be a somewhat narrow doctrine or the Courts, hardly in accordance with the general principles of the law, having regard to the increased population of large towns in later times."

57 *Ibid*., pp. 331–40.

58 *Ibid*., p. 19, p. 21, p. 65.

59 *Ibid*., pp. 68–69.

60 Leslie Stephen, *Some Early Impressions* (London: Hogarth Press, [1903] 1924), p. 24. Leslie Stephen, *Life of Henry Fawcett* (London: Smith Elder, 1866), pp. 57–58. Leslie Stephen, *The Life of Sir James Fitzjames Stephen* (London: Smith Elder, 1895), p. 96. "...his [Fitzjames's] walks were always enjoyed as opportunities for reflection."

61 George Meredith, *The Egoist*, ed. Robert M. Adams (New Yok: Norton, 1979), pp. 47–57. J. A. Hammerton, *George Meredith: His Life and Art in Anecdote and Criticism* (Edinburgh: John Grant, 1911), p. 4. Virginia Woolf, *To the Lighthouse*,

edited by Susan Dick (Oxford: Shakespeare Head Press, [1927] 1992), p. 21. "Looking at the far sand hills, William Bankes thought of Ramsay: thought of a road in Westmorland, thought of Ramsay striding along a road by himself hung round with that solitude which seemed to be his natural air." 散策中のスティーヴンの脳裏に去来したであろう想像、心象が巧みにとらえられている。*Ibid*., p. 39. "…as he ambles at his ease through the lanes and fields of a country known to him from boyhood. It was all familiar; this turning, that stile, that cut across the fields. Hours he would spend thus, with his pipe, of an evening, thinking up and down and in and out of the old familiar lanes and commons, which were all stuck about with the history of that campaign there, the life of this statesman here, with poems and with anecdotes, with figures too, this thinker, that soldier; all very brisk and clear."

62 A. H. Sidgwick 'Walking Alone,' *Walking Essays* (London: Edward Arnold, 1912), pp. 249–72.

63 Virginia Woolf, 'Leslie Stephen, the Philosopher at Home: A Daughter's Memories,' *The Essays of Virginia Woolf: 1929 to 1932*, ed. Stuart N. Clarke (London: Hogarth Press, 2009), vol. 5, pp. 58–89. Leslie Stephen, 'The Study of English Literature,' *The Cornhill Magazine* (1887), LV, p. 465. "I am equally certain that most of us can find something to read, something the reading of which can become a ruling passion, something, too, which will please our intellects, give keenness to our perceptions and strength to our sympathies, something which will make us better specimens of the human race, and more fitted to discharge any of the duties which lie before us. And if fully to qualify ourselves requires a struggle, it is a struggle which will bring an ample reward."

64 Keith Thomas, *Changing Conceptions of National Biography: The Oxford DNB in Historical Perspective* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), p. 15.

65 Leslie Stephen 'National Biography,' *Studies of a Biographer* (London: Smith Elder, 1898–1902), I, p. 12. F. Maitland, *The Life and Letters of Leslie Stephen*, pp. 373–404.

66 Lord Eversley, *op. cit*., p. 330.

表 1　**The Sunday Tramps and Other Walking Societies**

1824	the Association for the Protection of Ancient Footpaths in the Vicinity of York
1826	the Manchester Association for the Preservation of Ancient Footpaths (later, the Peak District Nothern Footpath Preservation Society)
1840s–60s	(1780–1855)　The Highland Clearances in Scotland
1845	the Scottish Rights of Way Society
1851	**Albert Smith's Ascent of Mont Blanc**
1854–65	**the Golden Age of English Mountaineering**
1857	**the Alpine Club**
1865	**the Commons, Open Spaces and Footpath Preservation Society** (the Open Space Society)
1866	the Metroploitan Commons Act
1877	the New Forest Act
1879	**the Sunday Tramps** by Leslie Stephen
1880	the Manchester YMCA Ranbling Club
1884	the Forest Ramblers Club (Epping)
1888	the Polytechnic Club of London
1892	the West of Scotland Ramblers' Alliance
1894	the Midlands Institute of Ramlers
1895	**the National Trust**, Acts of General Highways, **the Sunday Tramps**'s Last Walk
1897	the Co-operative Holidays Association (Lancashire)
1900	the Sheffield Clarion Ramblers by G. B. M. Ward
1905	the London Federation of Rambling Clubs by L. Chubbk & J. A. Southern
	Liverpool (1922), Manchester (1923), Sheffield (1926)
1907	the Manchester Rambling Club
1912	the Society for the Promotion of Nature Reserves
1914–18	WWI
1919–21	Anglo-Irish War
1921	the Workers' Travel Association (WTA)
1923	the British Workers' Sports Association (BWSA)
1926	the Council for the Preservation of Rural England (CPRW)
1928	the British Workers Sports Federation (BWSF)
1930	the Youth Hostels Association (1907, Germany)
1932	**The Battle of Kinder Scout**
1933	the Rights of Way Act, 1932
1934–35	the Ramblers' Association (the National Federation of Rambling Associations)
	the Camping Club, the Co-oprative Holidays Assocition (CHA), the Holiday Fellowship (HF)
1949	**the National Parks and Access to the Countryside Act**

図版出典

1 *Illustrated London News* (25 December, 1852), p. 565.
2 Ralph Hyde, *Panoramania! : The Art and Entertainment of the 'All-Embracing' View* (London: Trefoil Publications / Barbican Art Gallery, 1998), p. 162.
3 *Rambling: The Journal of the National Council of Ramblers' Federations* (June, 1933), The First Number.

――甲南大学名誉教授

Summary

Some Aspects of Walking in the Victorian Age

Toshiro Nakajima

Two possible meanings of walking can be found and discussed in Victorian culture. The Romantic poets, including Wordsworth, found in walking greater scope for aesthetic enjoyment of nature and landscape, and gave expression in their varied narratives and descriptions of walking as a mental pursuit. From the early eighteenth century onward, on the other hand, a strong tradition of pedestrianism had developed alongside profitable activities such as gambling and entertainment.

In 1851, Albert Smith, one of the greatest showmen of the Victorian age, climbed Mont Blanc. Performed 2000 times at the Egyptian Hall, his panorama and lecture on the celebrated 'Ascent,' descriptive of the adventure and Anglo-Continental life in general, was the most spectacular entertainment during the Victorian era. It was immensely successful, and contributed a great deal to promoting the interest in mountaineering, the new sport of the upper-middle class in mid-Victorian England.

A great walker, Leslie Stephen, who edited the *Cornhill Magazine* from 1871 to 1882, and in 1882 undertook the editorship of the *Dictionary of National Biography*, was elected a member of the Alpine Club in 1858, became President in 1865, and was the first man to climb the Schreckhorn. Being considered one of the greatest climbers of his day, he took a very serious view of the dangers of climbing and was opposed to unguided climbing.

Victorian Britain saw an increasing middle-class participation in

recreational walking, along with the establishment of organizations such as rambling clubs and footpath preservation societies. Sunday Tramps was a walking group of influential late Victorian intellectuals brought together by Leslie Stephen who proposed a plain living and hard walking. Within the group of pedestrians guided by him, "there was," George Meredith remarked, "conversation which would have made the presence of a shorthand writer a benefaction to the country." Such walking networks were vital in generating the significant thought that marked the late Victorian era.

On the occasion of a Sunday tramp, the Russian historian Paul Vinogradoff urged F. W. Maitland to pursue the study of the history of the English law. Through the stimulating metaphysical talk about legal history with Vinogradoff, Maitland determined to devote his life to the historical study of English law. *The History of English Law before the Time of Edward I* (1895), acclaimed as one of the great historical studies, was envisaged as a joint venture bearing the names of both Frederick Pollock and F. W. Maitland. There were many extraordinary individuals among the members of the Sunday Tramps who did much to shape Victorian culture. The significance of clubbability cannot be underestimated. Several of the Tramps were members of the Alpine Club, the Metaphysical Society, the Athenaeum Club and the Savage Club.

Members of Sunday Tramps attempted to preserve some portions of local topography from destruction. Leslie Stephen, who was also Secretary to the Common Preservation Society founded by Lord Eversley in 1865, was active in the movement for preserving Open Spaces. This voluntary and absolutely nonpolitical association insisted on the preservation and protection of commons and village greens, and emphasized the necessity of Open Spaces to secure the health and the reasonable enjoyment of life, especially of those who live in towns. The Society was animated by the main idea that the amenities of everyday life should be placed within reach of rich and poor alike.

Octavia Hill and Robert Hunter, both founding members of the

Commons Preservation Society, were deeply involved in the struggle for public access. They campaigned for the preservation of open spaces and historic buildings. On 12th January 1895, the National Trust for England and Wales was registered. The aim of the Trust was "to promote the permanent preservation, for the benefit of the Nation, of lands and tenements (including buildings) of beauty or historic interest."